



TITLE:

雍正時代地方政治の實状：硃批諭旨 と鹿洲公案

AUTHOR(S):

宮崎, 市定

CITATION:

宮崎, 市定. 雍正時代地方政治の實状：硃批諭旨と鹿洲公案. 東洋史研究
1959, 18(3): 241-266

ISSUE DATE:

1959-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/148164>

RIGHT:

東洋史研究

第十八卷 第三號 昭和三十四年十二月發行

雍正時代地方政治の實狀

——硃批諭旨と鹿洲公案——

宮 崎 市 定

一 は し が き

雍正硃批諭旨の一書は誠に驚く可き史料で、清朝の一時期を切斷して、その横斷面を詳細に後世に傳えてくれる。社會萬般に亘つて、これほど丁寧な記録は外に類例がない。それにも拘わらず、地方末端の政治の實狀についてのことになると、これだけではまだまだ不足で隔靴搔痒の感がある。何となればこの書の性質として、その中に収められた奏摺は凡て地方大吏の手になるものである。文官では布政使、按察使以上、武官では總兵官以上である。稀に道台、知府を含むがそれは稀有の例にすぎない。⁵¹⁾ところで布按二司以上は、一省の責任者であつて雍正帝から地方政治の大權を委託されたものである。だからその立場は省全體の利害に關すること、個々の地域の問題は、たとえ下部からの報告を取次いでも、それは單なる骨格だけにすぎぬ場合が多い。然るに我々はもつと地方末端の政治の實狀を知りたいのである。雍正帝獨特の奏摺政治は官紀の振肅を第一の目標としているが、天下は廣いから到底天子一人の眼で、知縣級の直接民政に携わる官僚

を監督することはできない。その仕事は大概布按以上、總督巡撫等に任せてある。従つて雍正帝の官紀の振肅は、間接的に地方民治に及んでくる筈で、下手をすれば途中で立消えになりそうな氣配すら感ぜられぬでない。雍正流のやり方で、雍正帝の理想とする所が、いつたい何處まで達成されたらうか。雍正硃批諭旨を讀めば讀むほど、我々はそういう疑問を増し、別の史料によつてこの疑問を確めて見たくなるのである。

幸いにして我々は、この問題に一つの解答を與える史料を有する。それは藍鼎元の鹿洲全集に収められた鹿洲公案なる一書である。抑も藍鼎元（一六八〇—一七三三年）なる人物は漳州府漳浦縣の人で、康熙四十二年、二十四歳で生員となつたが、その時の成績は、縣試第一、院試第一であつた。康熙六十年に臺灣に朱一貴の亂あり、彼は族兄の藍廷珍の私設秘書として從軍し大いに功を立てた。雍正元年、拔貢生として國子監に送られ、たまたま大清一統志の編纂があつたのでその手傳いを命ぜられ、恐らくその賞として、五年十月、潮州府普寧縣の知縣に任ぜられた。⁽²⁾併し彼は翌月には署潮陽縣事を命ぜられ、約二年間潮陽縣を治めた。鹿州公案は實にこの二縣に在任中の體驗を物語るものであり、文章も新鮮で讀み物としても面白いが、それ以上に地方末端の政治の實狀が分つて興味深い。尤も欲を言えば、これも治者側の記録であり、被治者たる民衆の氣持とは若干ずれの生ずることは已むを得まいが、既に政治が末端の縣まで來れば、我々は彼の手柄話の中からでも、治者被治者の立場を離れた公平な觀察を下すことが出來そうに思われる。

二 縣政の妨害者

縣の長官を唐代までは縣令と言ひ、宋以後は知縣事と稱するが、名稱の變化と共にその職務も多少變つてきている。縣令は天子から與えられた縣の長官である。天子から與えられたにもせよ、與えられた以上はその縣の代表者となつて縣を支配しなければならぬ。然るに知縣事は天子の名代としてその縣民の上に臨むのである。言わば中央からの紐つきである。いきおい、縣民の利益を代表するというよりは、中央の要求を地方に押しつけることになる。その要求の第一は租税

の納入である。尤も理窟から言えば中央政府も結局は地方人民の爲に存在するものだから、地方から出す租税は決して只で中央に引上げられるものではない筈である。併し實際問題としては租税が空費され悪用される虞れさえあるのが實狀なので、租税の徴發には大きな抵抗が起る。知縣は何よりも先ず租税徴収を阻害するものと戦わなければならない。而して彼の経験によれば、その障害の最大のものは地方に盤踞する土豪であり、次には之と氣脈を通ずる自己の衙門の胥吏であつた。

知縣の第二の職務は、當然のことながら地方を安寧ならしめることである。そして地方の平和を破るものに盜賊は論外として、中國特有なものに窩盜、訟師の類がある。

最後に知縣は自己個人の地位を守るために戦わねばならぬものがあり、それは意外にも自己の上司の或者なのであつた。中國は時代が下るに従つて所謂官場の習氣が濃厚になり、派閥が激しくなつて、正しい人事が行われ難い。硬骨漢ほど上司からの壓迫を受け易い實狀にある。凡そこれらの事實は、當然豫期されるものも、豫期されざるものも、それを當事者自身の直接の體驗として語られたのを聞くと、たとえそこに多少の誇張はあつても、生々しい現實感を受けずには居れぬ。彼が知縣を署理した潮陽縣を含む潮州一帶の氣風について、彼は潮州風俗考(全集初集卷十四)なる一編を著わして往時と今時とを比較している。いわゆる往時とは清朝以前のことだと言っているが、實は雍正初年のことを指しているらしい。その状態はと言えば

農ならず秀ならず、身を公門に竄れ、郷民の獄訟にその魚肉を恣ままし、遂には煬虐の喩の如く天子の明をも蔽い、威福を藉養すること士大夫よりも横なり。而して鄒魯の風、之が爲に一變せり(胥吏)。行伍の餘、流れて闖棍となる。俠に似て俠に非ず、目を街衢に瞋らし、杯酒殺人に代うべく、一呼して百諾を聞く(棍徒)。胥役の餘、流れて衙僮となり訟師となる。間々衿監の靡然として慕倣するあり。而して刁訟の風、熾んにして遏むべからず(訟師)。既に刑を懷わず、遂に憲網を輕んじ、國賦を包侵し、征輸に抗拒し、積連連年、妄りに肆赦を希い、氣を負い争を喜び、勇を好み闘

を尙び、睚眦の小嫌にも即ちに所親を率いて闘し、刀兵を以て相格し大敵に臨む如きものあり。強者は弱を凌ぎ、衆者は寡を暴す（土豪）。その時健訟習を成し、刁訟寔區に申たり。潮陽一縣の詞狀、日に投ぜらるるもの一千八百楮、海陽・揭陽は五百楮、その他或いは三四百、或いは一二百、多寡同じからざるも、未だ百以内にあるものあらざりき（訟師）。またその時、通賦風を成し、紳衿大豪は小民に較べて更に基しとなす。是を以て捐して雍膠に籍をおくこと、亦天南に甲たり。諸邑の監生、多きものは二千人、次なるは千餘人、最下なるも亦數百人あり、護符を恃み催差を撻す。命を捨て催科するも十分の五六を完すること能わざりき（土豪）。

とあり、地方官にとつては鬼門の難治の區であつたのである。然らば彼は如何に、此等縣政の妨害者と闘つたであらうか。

(1) 胥吏

署潮陽縣事藍鼎元が、先ず洗禮を受けたのは、股肱の部下たるべき胥吏の反抗であつた。諺に、

官は吏を見る一七日、吏は官を見る三日

とある如く、胥吏は官員の人物を見抜くことが、官吏の胥吏を見るより二倍も早く、更に徐々に實驗を積み重ねながら出来るだけ之を愚弄しようとする。若し強權で彈壓されると、最後の奥の手を出してストライキするが、之を散堂、または哄堂という。藍鼎元の前任者、魏知縣は胥吏のストライキにあい、縣衙の胥吏二三百人が東山に立籠つて歸つてこないで、魏某は土豪劣紳に頼んで仲裁に入つて貰い、好言を以て勸慰して山を下らせたので、其後は土豪にも胥吏にも頭が上らず、職を投げ出すの已むなきに至つた。これも實は租税の徴収に關して、土豪が胥吏を煽動してのストライキであつた。

さて藍鼎元が潮陽に蒞任した時、喫緊の問題は結局租税徴収の遂行にあつた。彼の言う所によれば潮陽一縣は毎年税米一萬一千餘石を徴収して、之を海門・達濠・潮陽・惠來・潮州城守の五營に供給しなければならぬ。藍鼎元が雍正五年十月着任して見ると、倉庫には一粒の米もなく、五營の軍士は俸給運配がたまつて半年間にもなり、食物がなくて鶴のうに瘦せ細つてゐる。いつ何時、兵變が起るかもしれない物騒な状態である。これは三年續きの凶作の結果でもあるが、

また歴代の知縣の政治の手腕の貧困にもよることなのだ。

租税の滞納は決して、地方民間に米がないわけではない。その證據には貧乏人は大てい正直に納付ずみになっているのに、滞納者は有力者の大口が残っているのである。ざつと潮陽一縣で郷紳・舉人・貢生・文武生員が七八百人、その上に金で買った監生が千三四百人、これに準ずるのが上司の書吏衙役となつてゐる者、勢豪大棍と稱せられる者が更に幾千百人を數える有様で、租税催促に係りの圖差を指しむけても、此等の家には怖がつて寄りつかない。うつかり家に足を踏み入れようものなら、皆で寄つてたかつて縛り上げて私刑を加え、逃げれば追いかけてきて縣廳の庭で公然と袋叩きにするという有様だ。そこで圖差の方でもこういう手強い者を相手にせず、ひたすら小民をつけねらつて強迫し、それも錢を掴ませれば見逃しておく。いよいよ強制執行という段になると、そこらの乞食を滞納者に仕立てて連行し、軽い筈で形式的に叩いて追い返す。これでは何時まで立つても租税が集まらぬ筈だ。

上司の方でもしびれを切らし、今年は潮陽縣が不作で租税が集まらぬなら、縣の責任で隣の程鄉縣、鎮平縣から米を借りて來て急場を凌ぎ、來年になつてその借りを返せと言つてきた。これでは知縣の顔が丸潰れだ。それに借りたものは返さなくてはならぬ。その際の運賃は當然借り方が持たねばならず、途中の損失も見込まねばならぬ。何とかして潮陽の義務は潮陽で果したいと胥吏頭に相談するが、胥吏頭はてんで相談にのろうとしない。よしこうなれば知縣の責任で一切を解決してみせるぞ、と藍鼎元は腹をきめた。私は潮陽縣人の善意に信賴する、と彼は昂然と言ひ放つ。彼は早速縣民に對する檄文を認めた。曰く

潮陽は大縣だ。物資が豊富で文化が榮え、人物も輩出し、海濱の鄒魯だとさえ言われてきた。ここ數年不作が続いたとは言ふものの、今年の出來は八割作と見られる。これで民間の食糧不足は解消したが、氣の毒なのは軍隊で半年も俸給運配がたまつてゐる。抑も軍隊は人民を守るためのもので、人民は租税を拂つて軍糧を供給するのが當然の義務だ。ところが依然として租税が集まらないので上司からは隣縣から米を借りてこいとお達しだ。ここが潮陽人の考え所だ。

借りに行く先の隣縣は二流三流の小縣だ。そこでは租税の米が倉に一つばいになつてゐるのに、堂々たる大縣の潮陽から頭を下げて借りに行かれるかどうか。もちろん責任者は知縣だが、知縣の顔と一しよに潮陽土着の士大夫の顔が全潰れになりはせぬか。そこで一つの相談だ。何分不作續きのあとだから、縣民諸君も租税の全納は苦しかろう。本官はそれに同情してこの際完納する者には納税の便宜を計りたい。税米一石に耗米として附加税一斗は天下の通例だ。併し本年に限り附加税一斗は五升ですませよう。もちろんそうなれば縣廳の諸雜費が不足してくるが、それは知縣が自ら節約して埋合せよう。こう定つたからには、古い滞納から取立てに行くので誠實な協力を願いたい。それでもなお納税を拒否する者があれば、これはもう論外だ。最早知縣の能力の範圍外で、お上の法律を適用する外はない。縉紳衿監など一般人民の上に立つ者には最も嚴しい規則で望むつもりだ。官員の地位を奪われ、學生たる身分を剥がれることはおろか、家破れ身亡ぶに至るとも、知縣のせいにして恨まないでほしい。

こういう揭示を張り出して待つてゐると、管内の人民は、知縣の言うことは道理だ、知縣の顔をたててやれ、と續々租税を納めにやつてきた。併し中には、せせら笑つて取り合わない者もいる。それは大い貢生監生という身分の者だ。そういう奴は目星をつけて縣へつれてくる。滞納の總額を計算して目の前へつきつけ、

これ以上の話合いは無駄らしい。この通りを上司に報告して、學生の身分を剥奪したい。併し今直ぐでは取返しのかねことになりそうで氣の毒だ。暫くの反省期間を與えるから、未決の拘置所へでも入つて熟考を願おうか。尤も租税を全納さえ下さらばすぐにもお出ししますから、

と獄へぶちこんでしまふ。すると大ていは租税を届けて歸つて行くものだ。ところがこの事が評判になると、學生は縣へよび出してもなかなか出てこぬようになつた。そこで訴訟の際を利用して網を張ることにした。潮陽は訴訟の多い所で、三日に一ぺん訴訟を受付けるが一日に多い時は二千枚、少い時でも千二百枚の訴狀を受取る。そこで關係者の姓名點呼をする時に學生がゐると先ず租税の納否をしらべる。完納者に對しては獎勵して禮遇するが、滞納者はすぐ獄へぶちこむ。

こんなやり方で租税の徴収は案外すらと運び、隣縣から米を借りてこないでも軍隊に糧米を支給することが出来、年末までには遅配の分まで全部支給をすませることができた。その時の部隊長等の喜びようは格別であつた。「軍隊の不満を抑えるには随分苦勞しましたが、これで報われました。尤も始めは半額でも三分の二でも貰えば貰え得だと思つていた程でしたが全額支給とは。知縣の腕前は正に神業だ！頭が下ります。」

ところがうすうす豫期していたことが遂にやつてきた。從來の租税滞納には、抑も縣廳内部の胥吏共が通謀して一役買つていたことなのだ。そして藍鼎元をも脅迫して、依然租税滞納を續けさせ、巧く行けば最後に全部を帳消しという所へ持つて行きたかつた所へ、藍鼎元一人の決斷で、租税がすらすら集つてしまつた。胥吏共の顔が今度は丸潰れになつた。そこで打つた芝居が胥吏のストライキ、散堂である。

ある夕刻、わあツという喊聲と共にばたばたという足音がざわめいて、大ぜいが東の方へ走つて行つたと思うと、あと事務室の中が急に靜かになつた。書吏頭が一人顔を出して

「長官！ ストライキです」と叫んだ。

「東山へ行くのかい」と落付いてたずねる。

「きつとそうだと思います。」

「そうか。併し城の門はもう閉じた筈だ。まてまて。余が軍隊へ人をやつて城門の鍵を借りてきて開けさせてやる。行きたい所へは行かせるものだ。」

藍鼎元が少しも驚かないので胥吏頭が反つて不思議そうな顔をして引つこんだと思うと、胥吏の先輩株二三十人を引つれて又入つてきた。

「どうか私共にお任せ願います。逃げ出した奴等を連れ歸りますから。」

「よせよせ。相手は二三百人もいる。お前たちに何ができるか。ほうつておけ。明日はお前等に面白い捕物陣を見せて

やるぞ。天下太平の今日、胥吏共が職務を抛棄して山へ立籠るとはおだやかでない。知縣の租稅取立てが嚴しすぎるのが不満だというなら、その知縣はお上の委任でやつてゐることで知縣の罪ではない。胥吏が知縣に叛くのは取りも直さずお上に叛くことだぞ。明日はいよいよ知縣が軍隊や警察の民壯を引率して、花々しく一戰を交えるつもりじや。叛亂平定の勳は軍功と同一に褒美が貰える。それにしても叛亂に加擔した奴は哀れ、その場は逃げおうせても、家や親類先まで尋ね出されて裁判を受けるぞ。併し加擔した者と加擔せぬ者と一しよに處分されては氣の毒だ。お前たちは一體誰々が残つてゐるか、今すぐに點呼して見よ。逃げたい奴は決して追つてはならぬぞ。」

こう申渡して待つてゐると、胥吏頭が人員點呼の用意が出来たと報せてきた。庭へ出てみると大ぜいが集つてゐる。夫々の組に分けて點呼させると誰一人缺席者はいなかつた。

「おかしいな。全部が居残りだ。いつたい東山へ逃げたとは誰が言つたのだ。よくもこの俺を見損つたな。余は昔臺灣の軍中にあつて三十萬の賊を見ることが草芥のようなものだつた。況んや東山の石ころ如きは靴先ぎで一けりすれば轉りおちるだけのものだ。今度のこととは忘れてやるが、今後は心を入れかえて奉公に精を出せ。」

この事があつてから、胥吏共はびくびくして規則を守り、土豪劣紳も二度と租稅滯納で手間をかけさせることはなくなつた（以上鹿洲公案卷上、五營兵食）。

(2) 土豪

中國の中部南部は遅れて開けた土地なので、まだ個人主義が發達せず、一族聚居の習慣が残つてゐる。そこに大族・小族の區別が生じ、械鬭のような武力闘争も起る。いわゆる逋賦抗糧といわれる租稅の意識的滯納はこれらの大族であり、清朝に至るまで水滸傳式の山寨を造つて立籠つてゐた。

潮陽縣十三都の中、洋烏都の山門城は趙姓の根據で、趙氏一門は千丁を數え、衣冠の士だけでも數十人を含む。族中の趙麟、趙伯、趙鎬は康熙六十一年以來、雍正六年まで租稅の正味だけで銀六十九兩、米六十八石有餘を滯納して平氣で

いる。圖差の劉科等三人を差向けたが返事をしない。更に三人の添差を加えて出してやつたが出てもこない。三月六日に更に保正の周理をやつて出頭を促がし、同家の趙德迎を捕縛して引上げようとすると、一族の監生趙佳璧なる者が聞きつけ、同族に對す侮辱的挑戰だとばかり、二三十人を率いてかけつけ、劉科の頭を毆傷し、趙德迎を取返して逃げた。そこで此方も人數を増し、附近の保正等に加勢させ元凶の趙佳璧と趙德鸞の二名を捕縛に向わせると、向うから出てきたのは趙阿武を大將とする三四十人で、此方は衆寡敵せずして大敗して逃げ歸り、保正の周理が額を割られて血を吹くという始末。藍鼎元は事の仔細を上司に報告すると共に、縣尉の馮瀕に警察と軍隊とを伴つて現地に赴かせることとしたが、その場に及んでもなお馮縣尉に耳打ちして、「要するに目的は租税を納めるかどうかにあるのだから、早まつて事を荒立ててくれるな」と注意した。すると馮縣尉も感激して、「明公がそれ程に心配されるならば、軍隊を引率して行くのは暫く見合せて、私が先ず當つて見ましよう。」と手下の警察だけをつれて出て行つた。縣尉は山門城へ行つて趙佳璧等一同に面會し、租税滞納を詰問すると、彼等の言い分はこうだ。

従前租税の徴収にこんな強制を受けたことは嘗てない。祖先以來一度だつて百パーセント完納はしたことがなかつた。そして十數年たつと、その間の滞納は赦免にあつた。今度のように縣令が衙役などを使つて、讀書人の一族に對して無法を行うのには腹が立つた。我々は上司に控訴して衙役等を處罰して貰おうとさえ思つてゐるのに、納税とは何事だ。という状態で全然問題にならない。切りに利害を説いたが聽入れず、趙佳璧一人が縣へ出て話合つてはと勸めたが聽入れず、少しでも納税しておいて反抗でないことを表明したらばと誘つても應ぜず「別の知縣がやつてくるまでは動かない。」の一點張りである。流石の縣尉も爲す所なく引上げてきた。

縣尉は今度は軍隊に出動して貰つて山門城に押寄せると、先方も戦闘準備を整えて、寨門を固く閉し、寨内には刀槍林立し、鋒銳が閃々として牆頭上に露出している。縣尉の呼び出しに答えて、こう聲言する。

我等は租税も滞納したし、圖差を毆つたことも事實として認めよう。上司に報告して學生の籍を剥奪しようというなら

それも勝手だ。併しこの寨門は決して開き申さぬ。お好みなら攻めこんで來られるがよろしい。我々も手並みを御覽に入れよう。

と飽迄も頑固な態度に縣尉も手をやいて事情を報告してきた。併し此方の困つた頃が、向うでは更に大きな弱點を現わした時だ。早速實情を上司に報告して學生の身分を奪い、首謀者を黑龍江に發遣する罪に處せられんことを請うと共に、自身も民兵を引率して山門城攻圍に出陣した。先ず檄文を造つて山門城の趙姓一同に示して歸順を促した。

租税はお上に納めるもので誰彼を問わない義務である。納税者が納税しなければ、誰かが代つて納めなければなるまいが、一體誰に納めさそうとするのか。本縣は理によつて再三催促したのに、お前等は粒米も納めず、反つて圖差を殴り、犯人を奪い返す暴舉を敢てした。それでも本縣は直ちに法律を適用するのを延し、縣尉を遣して説諭再三ならしめたがなお應ぜず、門を閉じ槍械を設けて反抗し、殆んど叛逆と同じ道を辿らうとしている。お前達は本縣の手段が悪いために、良民を叛亂に追い立てたと喧傳して、本縣の落度にしようとするが、一體どこに手拔かりがあつたと思うか。お前たちこそ田舎者のわからずやで、重大な運命の瀬戸際に立つているのを自覺しないか。本縣は今、民兵と警察を總動員して配置につかした。軍隊も續々集結しつつある。最早一人として寨内から出外するのを許さない。日時を定めてこの寨を一つぶしにするだけだ。或いはその中にまだ良心を残している者が居るかも知れない。玉石俱に焚かれるのが嫌ならば今が決斷の時だ。三日間の猶豫を與えるが、その後は本縣の知つたことでない。

こうして最後通牒を送ると共に、山門城を十重二十重に取圍んだから、趙姓の方でも大いに畏懼して動搖しだした。中には趙佳璧を捕縛して差出せという者も出てきた。趙佳璧等は段々立場が苦しくなつて、遂に一味關係者の十七人と共に降参してきた。彼等の舉動はもとより悪いが、從來彼等を甘やかしてきた政治方針も悪かつたのだ。要するに問題は租税から出たことで、あとの派生的な事件にこだわる必要はない。趙佳璧等は一先ず未決の拘置所送りにし、租税の完納を見てから結末をつけると言いわたした。明年の三四月になつて滞納は全部片付いた。藍鼎元は既に轉任し、後任の知縣が事件

を受取つて、彼等の一二人を處罰し、趙佳璧も罰金位で済ませようとしたが、總督の孔毓珣がきかない。この首謀者を見逃しては今後のみせしめにならないと言つて、とうとう學籍を剝奪してしまつた（以上鹿洲公案卷下、山門坡）。

ここに描かれたような土豪が城寨を構えて聚居している状態は決して中國近世社會の常態ではない。寧ろ遅れた地方に残つた中世的遺物であると言つてよいであらう。械闘のような現象もここから派生する問題であり、我々は反つて之によつて六朝貴族の生活状態を想像することが出来る。それにも拘らず、教育、文化の普及は彼等土豪の行動を六朝的な貴族にはしてつわないのである。

(3) 訟師

これは藍鼎元が始めて普寧の知縣に赴任した雍正五年七月から、一月たつたたぬかの頃に起つた事件である。縣民の陳天萬なる者の妻の許氏が、嫉妬のあまり、妾の林氏の連れ子なる幼兒王阿雄を毒殺したと、從兄の王士毅が訴えて出た。被告の陳天萬と妻の許氏を喚出して問ひ訊すと、阿雄は腹を病んで二ヶ月して死んだので醫者にもかかつていて別に不審はない。妻の許氏こそ肥大病で牛のように太り三四人が抱ぎかえて入つてきた程で、九年以來の病氣だといひ、到底人を毒殺しそうな人間とは見えない。ただ一つの問題は、死者の遺骸が墓地から消え失せていることで、事件發覺を恐れて、誰かが何處かへ匿してつたと疑えば疑えない事はない。藍鼎元は反つてその細工をやつたのは、原告の王士毅に違ひないと目星をつけた。段々取調べて見ると、王士毅が阿雄の死んだ後、陳家の親戚を尋ねてきて、阿雄の葬り場所を聞いて立去つたことがわかつた。そこで王士毅を訊問すると、果して身分の知れぬ乞食を頼んで阿雄の屍を盜ませたと白狀した。これで事件は明白になつたから、王士毅を杖三十に處決し、陳氏一家は無罪放免となり、判決を聞きに集つた縣民は、近來にない名裁判だと歡呼して歸つて行つた。

藍鼎元はこの事件には何か深い裏があるように感じた。そこで民壯の林才をよんで、王士毅のあとをつけさせ、同宿の人間が居たなら有無を言わざず引立ててこいと命じた。果して間もなく訟師の王爵亭なる者を同行してきた。清代には訟

師という行爲は所罰の對象になる。そこで始めのうち王爵亭は王士毅の爲に訟師になつたことを極力否認したが、文字を書かせて見ると、全く先の王士毅の訴狀と同一の筆蹟であることが暴露してしまつた。そこで拷問にかけて實を吐かせると陳偉度なる者の指金で阿雄の屍を盗み、隣縣潮陽の泮水都なる烏石寨附近に埋めたが、その地點は陳偉度でなければ知らぬと言う。そこで今度は陳偉度なる者を拘引させると、出て來たのは見るからに海千山千のしたたか者の訟師で、王爵亭などに比べると十倍も思慮の深そうな大物である。しかも意外なことには、これが被告の陳天萬の從兄弟にあたるのだつた。彼は堅くこの事件に無關係なことを力説している。

私は陳天萬の近親だ。何で陳天萬に不利益な謀みなどするものか。この王士毅・王爵亭の二人の不届者は既に從弟を重大犯罪に陥れようとしたのみならず、更に私にまで無實の罪を吹きかけようとしている。誠に包龍圖公の再來のような名縣知事に會わなかつたら、我々はどんな酷い目にあつたことか。

と切々と冤を訴えるし、その言葉も筋道が立つているので、ほんのすんでの事に、この重要人物を取逃して放免する所だつた。ただ不圖その目を見ると、きらきらと眸に光るものがあつて、どうも迂散くさい所がある。そこで試みに訊問して見た。

成る程聞きしに勝る訟師だ。聞いた所に關する限りは情理が具わつて寸分も隙がない。恐らく別の知縣ならそのままお前に言いまかされて了うだろう。不幸にも今度の知縣はお前のいう通り、包龍圖公の再世とやらだ。それを知つての上なら、一々匿さずに實際を白狀したらどうだ。

すると陳偉度は愕然とした様子で言葉に詰つたが、勢を得たのが王爵亭だ。

陳偉度お前は酷い奴だ。三人が同謀でこの事を相談したのは始から陳偉度の指金によるのだ。屍を盗んで隣縣まで運んで埋めれば實地檢證ができない。檢屍して屍體に傷がないことが判明せねば、陳天萬の毒殺の疑問は何時までも晴れない。皆が未決に拘留され拷問を受けたり、訴訟費用がかさんだ頃を見計つて賄賂を強制して和解を提議すれば、向うで

折れてくるに定つてゐるから、皆で一財産を造ろう。要するに阿雄の屍さえ出なければ計畫が露見する心配はない、と言つて我々をここ迄引つぱつてきたのは陳偉度お前ではないか。それが不幸にして龍圖公にあつて圖星をさされた以上、計畫は一ぺんにおじやんになつた。この時になつて二人だけを罪に落して首謀者が逃げようとは卑怯ではないか。

と今度は仲間割れの言い争ひになつた。こうなればめめたものだ。三人の謀議か、二人だけの密議かということになるが、先ず縣の東門の旅店で三人が連日同居していたことが分つた。更にその前には城内の林泰なる者の家で三人が三日三晩同居した事實が上つた。流石の陳偉度も遂に包みきれず、阿雄の屍は下溪尾という所で三四尺の穴を掘つて埋め、傍の樹を半分折り倒して目標しにしておいたことを白狀した。捜しにやると、果して屍體が出てきたので検屍したが別に異狀は認められなかつた。

陳偉度は有名な訟師で既に數々の惡事を重ねていたが、その伎倆を用いて何故にこの様な、從弟を陥れる謀略を案出したかを取調べると、それは祖父の遺産分配を廻つての争いが根にあつたのだつた。凡ての事件の根柢には田地とか、租税だとか、經濟をめぐる葛藤がある。欲と得との世の中になつたものだ(以上鹿洲公案卷上、三充盜屍)。

訟師が活躍するような社會にはどこかに缺陷があるものだ。中國の法律では被疑者はその無罪を明かにする證據がない時は、何時までも嫌疑が晴れないという奇妙な原則がある。これが棍徒に惡用され、胥吏がそれにつけこみ、時には官員までが片棒をかついで良民を苦める結果になるのである。

(4) 窩主

潮陽に監生馬仕鎮なる者があり、仙村に住んでいる。馬氏は巨族であり、その丁男は二千人餘り、一族が三寨に分れ、鼎足の形をなす。仕鎮は豪雄獷悍で尤も馬氏の冠たり。生れながらに盜癖があつて、人の財物を見れば心平かならず、攘竊して去らざれば止まず、至親密友も彼には物を見せるなと戒め合つた、という厄介者である。彼は柳跖・宋江の人となりを慕い、匪類を招邀し往來親密にしたので、四方無頼の輩がみな之に歸した。居宅の傍に大樓があり、群盜が至ればみ

な樓中に留めて歡待した。樓中の人衆百餘人に至り出入往來し臂を掉い目を瞋らし、横行忌む所なく人民の顔色を犯す者あれば直ちに拳を揮つて相向い、郷人は之を畏ること虎の如きものがあつた。

馬仕鎮はその始め攘竊を以て家を起し、漸くにして富饒を致し、康熙四十三年に捐納して監生の地位を買つた。これより儼然として士林を以て自ら居り、群盜も之を尊稱して馬老爹と言つた。馬老爹の名が潮州一帶に震い、撫按の承差や道府の胥役はみな潜に共に往來し、探索に出された者も十に八九はその家に滞在した。そこで縣中の紳士や縣吏の捕役やが、争つて親交を永め、惴々として稍も意に拂ることを恐れた。併しこの爲に附近一帶の人民は夜も安寝することができなかつた。さればとて官司に密告して捕治しようとするれば、捕手に抵抗して毆つて追返す始末。潮陽知縣となつた者前後十人、之を拘禁しようとした隙を覘うこと三十四年、遂に成功しなかつた。そこで喰わすに利を以て籠絡しようと考え、彭知縣は第五都の租税の催督係りを申付けたが、盜賊行爲は依然としてやめなかつた。次に支知縣は大いに怒りを發し、軍隊四百人を動員して貰い、自ら仙村に向向したが、仕鎮は三寨に命じて門を閉じて拒守させ、火炮を放つて知縣の軍隊に攻撃を加えてきたので、同行した武官が反つて恐れをなして引上げてしまつた。而も上司の左右はみな馬氏の腹心なので、上司は反つて支知縣の行き過ぎを責めて馬仕鎮と仲直りを命ずる結果になつた。次に魏知縣は仕鎮を縣の西南地方の總約長という名譽職に任じて機嫌をとろうとしたが、仕鎮は益々驕横となり、郷村のみならず城中に入つてまで盜賊を行うほど大膽になつてきた。

たまたま馬仕鎮の部下の胡其暢なる者が、潮陽城内で布帛買賣を營む商人陳開發の家に入り、數百丈の綿布を盗んで去つたが、その背後に馬仕鎮のあることが判つた。折しも藍鼎元は普寧知縣から潮陽知縣を委署され、赴任の途にあつたので、試みに馬仕鎮の仙村なる地に立寄つて實地を視察した。見ると仙村は人口稠密で三寨が鼎立し、彼の寨内には大樓が巍然として聳え、到底力を以て取るべきものではない。その夜は一晚中まんじりとせず、この對策を考えた。

いろいろな事情を探ると、縣の衙役なる馬快の一人に林承なる者があり、仕鎮の外甥であつた。そこで林承に命じ、知縣

が交替したから埃摺に來るよう馬仕鎮に勧めさせ、巧みに虎を縣衙門内に誘いこんで捕縛した。さてそこで陳開發家の盜賊事件を自白させたが、その外に何百件の犯罪があるか分らない。捕手をやつて仙村樓を搜索させたが、百餘人の盜賊はいち早く風を喰つて遁走したあとで何も獲物はなかつた。そして馬仕鎮は假にも監生という身分があるので、その身分剝奪を上司に申請している中に、藍鼎元自身が他の事で免職されて了つた。此奴を撲殺して百里内外の爲に禍を除いてやらなかつたのが一番の心残りだ、と藍鼎元は後悔した(以上鹿洲公案卷下仙村樓)。

明清律に盜賊窩主の條がある。強盜或いは窃盜を匿まつた者は、自ら行つてやつたことでなくても、強窃盜の罪に問われる。ただ窩主と直接下手人との間の關係は證據が上げにくいので、大盜は反つて屢々法網を逃れることが多い實狀である。馬仕鎮の場合などがそれであろう。但しこれも人權擁護の思想から言へば社會の進歩とも言えるであらうか。人權(？)擁護が行き過ぎると善良な人間が迷惑を蒙るのも古今一轍である。

(5) 上司

潮陽縣を含めた潮州府一帯は三年間の不作續きで穀物の不足が感じられてきた。府の上に立つ惠潮道の樓儼は前に廣州府の知府であつた。廣州知府在任中に仕殘した仕事は、凡そ五萬四千石ほどの穀物を民間から買上げる事であつた。そこで今潮州府が穀物不足になつたので、潮州府のためにそれだけの穀物を買うことで、やり殘した仕事の穴埋めをしようというわけだ。算盤の通りに行けば、潮州府下の穀價は一石銀八錢だが、同じ廣東省内でもずっと西の方高州へ行くと、とびきり上等米でも一石五錢、普通は三、四錢だから非常に經濟的になる筈だ。これが巧く行けば手柄にもなることなので、道臺の樓儼は最も執心に主張し、總督巡撫の賛成を得て、自ら仕事の全責任を引受けることになつた。ところで廣東西部へ實際に穀物を買うに行く人の人選だが、樓儼は自分の氣に入りの部下で巡檢級の官を選んだのが禍因となつた。巡檢は移動警察とも稱すべきもので、從九品という最下の文官であり、その部下は弓兵という民兵である。さて樓儼が派遣した三班の買出し船部隊の中、第一班は宋肇烟巡檢が頭で、先ず廣州に赴いて價銀を受領すると、拔目なく附近の佛山鎮で名物

の鐵鍋を買い、高州につくと鐵鍋を賣つて利益をあげた迄はよかつたが、そんなことで手間取つたため、いざ穀物を買つて歸る頃になると、もう風向きが變つてしまつて、高州を出るなり三千石近い穀物を波に浚われてしまつた。その上途中に海賊にあつたとか、船三隻が漂没したとか届けたが、不思議に自分の金で買つた隠し荷物には損失がなかつた。第二班の張宏聲巡檢が率いた船隊も同様、三千石近い穀物を流して了つた。

第三班の范仕化巡檢の船隊は廣東附近で穀物一萬五百五十石を買集め、その全部を潮陽縣知縣の藍鼎元に交付することに定められた。ところが之も同じような事情で信風の期を失したため歸路の困難が思いやられると、隊長の范仕化が一人で陸路を歸り、船を手下に任せたらたまらない。あとに残された衙役と雇われた船頭とは勝手の仕放題で、道すがら岸へ立寄つては穀物を賣つて着服したものだ。尤も賣り放しでは足らなくなるから、代りにしいな粳を買つてまぜ、その上に水をかけて膨らませて分量を増すという惡辣なやり方を知つていたのである。

四月二十八日に范巡檢下の船八隻が潮陽縣磊口という港についたという報せがあり、受取責任者たる知縣藍鼎元は受領に赴くことを命ぜられた。尤も今度の穀物が劣等だという風聞は早くから聞いていたので、豫め各船から見本一石ずつを取寄せ、縣堂で檢査した。先ずしいな粳が多すぎるので唐箕にかけて颺いで見ると、正味は八斗しかない。それを碾臼でひいて玄米にすると三斗八升から四斗やつとである。一石の粳で五斗以上の玄米という通念とは大分かけ離れている。ところが范巡檢は平氣なものだ。この穀は道台が買つたものだから、良否は道台に聞くがよい、船頭等は何も責任がないと嘯いている。一方樓儼道台からは、早く穀物を受領しろと、上司たる命令で矢の催促である。范巡檢は平素、道台から一番可愛がられていた子分なのだ。

困つたことだが、船は海岸に碇泊している。愚圖々々している中に暴風でも來て、船が難破するようなことが起ると、今度は受取方の知縣の責任にされる虜れがある。兎にも角にも受取事務は開始しなければならぬ。縣の胥吏に命じて數百艘の小船をつれて受領にやつたが、相手の衙役やら船頭やらは虎の如く狼の如きごろつきばかりである。劣等穀のしいな

雜りの、而も水をぶつかけた粃を、一割方少く押しつけられて歸つてきた。その上に歸り際に此方の船頭が向うの船頭と喧嘩をして、傷を負わされて逃げてきた。これに懲りて胥吏も船頭も穀物受領に行こうとしない。遂に藍鼎元自身が出かけることになった。

磊口の港について見ると、八隻の大船の上には「奉旨押運」と書いた大旗を立て、巡檢の甥の馬相公という者、衙役の高光、民兵の董明など下つぱの者が、道台の威權を笠にきて、將軍のような威張り方である。聞けば毎晩のように、船上に俳優や遊女をよんで飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎをしているという。併し藍鼎元としては仕方がないので穀物受取りの事務を再開したが、これでは後で勘定が合わなくなるのは必定だ。ところで受取つた穀物をふと見た途端に、不思議に思つたのは粃の中に玄米が混つていることだ。これはおかしい。最初から粃の中に玄米の入っている筈がない。これはこの近くで、船頭等が穀物を陸に上げて碾臼にかけ、その粃殻だけを持ち歸つて穀物に混えた時に入りこんだものに違いない。

そこで附近の陸上を搜索させると、果して棉花村の謝朝士という者の家から、まだ碾いてない高州穀四包を發見した。證據があれば船頭や水夫は捕縛することができる。八船の乗組を全部拘留して訊問すると、彼等が高州出帆以來、途中で寄り道しては穀物を賣つて着服していた罪狀が全部明るみに出た。これは勿論、巡檢范仕化が全責任を負つて賠償すべきものだから、この事を上司に對して公表しようかとも思つたが、また思うに范仕化は道台の乾分であり、自己も言わば道臺の屬員であるから、道台の顔に泥をぬるようでも拙い。そこで船頭が盗んだ穀物は船を賣つて賠償させる外、なお不足分の二千二百石の穀物は自分が罪を被つて辨償することにしてこの結末をつけた。ところが范仕化はこの處置にまだ不満である。船頭に賠償させるとなれば、矢張り范仕化の監督不行届き、范仕化の監督不行届きは道台の責任ということになる。知縣はそういう際には只黙つて穀物に不足なしと答えておけばよい。役目交代の際に新任の知縣に道台から一言話しておけば、新任知縣は決して倉穀の不足を問題にすることはない。長い間にはその缺損は自然に埋合されるものなのに、

それをしていないのは藍鼎元の依怙地から來ている、という言い分である。現に道台の目の前で、この事で議論をした。併し考えて見ると、倉庫の穀物は道台のものでもなし、知縣のものでもなし、實にお上の穀物だ。それは結局人民から出て國家の爲に消費さるべきものだ。それを途中で有耶無耶に損失させてはお上に相濟まぬ。道台は朝廷の大官だ。知縣以上にお上に忠實にならうと考えているに違いないと思つた。然るに范仕化はあとで人に話したそうだ。范仕化はこの事件で一時失職するかも知れぬが、間もなく浮び上るだろう。反對に道台から睨まれた藍鼎元は、范仕化の百倍も重い禍にあうだろう、と言つたとか。ところが眞逆と思つたことが事實となつて現われた。藍鼎元はこの時の受領した穀物が不足であつたというその理由を以て、道台樓儼の摘發を受けて、その結果、革職という處分で免官になつたのである（以上、鹿洲公案卷下、西穀船戸）。

三 知縣の進退

藍鼎元は雍正六年十二月内に、署理布政使王士俊の推薦で、番禺縣の知縣に調補された。果して彼が實際に發令され、赴任したかどうか不明であるが、この前後に局面は急變した。⁽³⁾それは惠潮道の樓儼が藍鼎元の贓罪六ヶ條を摘發し、之を取調べた王士俊は、今迄推薦していた藍鼎元を彈劾しなければならなくなつた。⁽⁴⁾そこで彼は取敢えず革職に處せられたが、もつと悪いことには、七年の二月、當の樓儼が按察使に昇任して一省の刑名を掌ることになつたのである。⁽⁵⁾樓儼は更に藍鼎元の罪狀を取調べて、倉穀三千三百石の不足があるとし、その賠償を命じ、賠償がすむまで未決監に拘留したというから無茶な話である。

併しこんな不條理な申立てに、總督や巡撫までが同意したのはおかしいが、實はこれには譯がある。雍正初年には廣東の官界には物凄い派閥争いがあつた。その眞相究明に派遣されたのが王士俊であり、更に喧嘩兩成敗のあとの重石に任命されたのが總督郝玉麟である。⁽⁶⁾彼等は特に黨派を立てぬよう、同僚が一致協力するように雍正帝から命ぜられて赴任した

ので、按察使の樓儼が強硬に主張すれば反對することを見合せた。大の虫を生かす爲には小の虫を見殺しにせねばならなかつたのである。

藍鼎元に同情した潮州府知府胡恂は、彼の同僚や縣民と計つて金を出し合つて賠償をすませ、獄から解放した上、潮州府志を編纂する委員に任じて内職の口を與えた。⁽⁷⁾ 一方敵手の樓儼はこの頃から次第に評判が悪くなつてきた。七年閏七月十二日付の奏摺で、署理廣東巡撫の傅泰から、樓儼は最早老いばれて役に立たぬから、もつと閑散な省の按察使に廻して貰いたいと上奏し、八年の初頃、樓儼が衙役の蕭鳴なる者を信任して失敗を演じた角で總督郝玉麟の密奏があり、樓儼は解任上京を命ぜられてゐる。⁽⁸⁾ 後任の按察使としては鹽運使の黃文煒が署理を命ぜられたので、藍鼎元も前途が明るくなつてきた。

更に雍正十年二月、滿洲人の鄂彌達が廣東總督として赴任してきた。彼は雍正帝が最も寵愛する鄂爾泰に次ぐ信任を得た人で、帝との間には漢人に見られない親愛感がある。彼は藍鼎元の人となりを聞き、門下に招いて幕友に任ずると共に、九月三日付の密奏で、藍鼎元革職の實情を訴え、十二月一日付の奏摺で再び赴部引見を願つてゐる。⁽⁹⁾ これが聞入れられて、特旨を以て京に召され、十一年三月、吏部官の立會いの下に、所謂帶領引見が行われた。雍正帝はこういう際には特に質問を試みてその人物を知ろうとするのであるが、奏對良に久し、とあるから相當長時間の應對があつたのであろう。そして彼の人物が氣に入つたらしく、やがて廣州知府署理を命じ、御書の諭訓詩文と貂皮・紫金錠・香・珠等の物を賜つて赴任せしめられた。これは異數の待遇であるという。ところが不幸にして彼は、同年五月着任すると間もなく病氣にかかり、六月二十二日、志を抱いたままで病歿してしまつた。享年五十四歳であつた。

下情の上達ということは、どんな政體の下でも非常にむづかしい。特に中國歷代のような獨裁君主制の下では、下達は容易だが、上達は行われ難い。併し雍正帝時代のように、獨裁君主制が極度に徹底すると、反つて下情上達が不可能でなくなる。天子がそれを求めて努力するからである。併し天子と地方政治末端の縣とでは、中間の距離がずい分長い。距離

が長ければ時間もかかるのである。私は中國近世の獨裁君主制の下で、天子の意向が果してどのように、どこまで下達したかを知りたかつた。藍鼎元の場合だと、雍正帝の好みにあつた知縣が見出されて廣東潮州府の屬縣に赴任するまで、卽位から五年かかつてゐる。その知縣が遠方で働いて、上司の恣意のために免職させられ、やがて復活するには今度は三年餘りかかつてゐる。併しこれは雍正帝のような天子が卽位した時の話で、他の時代であつたならば、藍鼎元の名譽回復は行われず、そのまま消滅して了つたかも知れない。

そんなら雍正帝のようでない天子が位について政治をさぼつていた時には、地方末端の政治は一體どうなるのであろうか。骨を折つて馬鹿を見るなら、誰も熱心に政治に精を出すものはないだろう。併しそうかと言つて、政治が全然暗黒になると考えたならばそれは行過ぎである。中國は廣く、廣いだけに善意の人は決して跡をたたない。そしてこの際に中國の傳統の儒學は、それなりに効果を發揮するのである。

藍鼎元の鹿洲全集卷十に怪尹記という一文があり、同僚の王輔なる人物の行爲を記している。彼は江南天長縣の人で、雍正三年安徽學政孫嘉淦に見出され、生員から貢生に拔かれ、潮州府海豐の知縣を特授された。藍鼎元と大いに肝膽相照したと見え、その行動は怪尹記の本文を引用した方が早い。

雍正五年丁未の冬、余潮陽にあり、海豐に怪知縣ありと聞く。その何の謂う所なるを知らず。明年春、便道して海豐を過り、之を其縣民に問うて曰く、汝の令君はこれ何如なる怪ぞや。對えて曰く、然らず、民を愛すること子の如く、縣を治むること家の如し。吾が縣に稀に見し循良の吏なり、と。曰く、然らば何ぞ怪を以て名つくるや。曰く、布衣蔬食して上官に事えず、直言を好み、諱忌に觸る。官はこの故に之を怪とす。余聞いて愀然として曰く、布衣蔬食は何ぞ人に害あらん。上官に仕えず。國に仕え民に仕う。廉直を以て怪となすは余も之を知らずと。薄暮に海豐縣の郊外に宿するに、怪知縣來りて吾を見る。果して衣は古き布衣、羸馬に乗り、兩人の皂隸を先導となすのみ。余曰く、ああ善い哉。されど清操もて人に逼るに、獨り媚嫉する者あるを畏れざるか。曰く、然り。嫉む者は多し。されど吾は吾が素(生地)

を行ふのみ。吾を嫉む者も吾が官を奪うに過ぎず。吾は徒歩して郷に歸らんに、何の害あらんや、と。この時嶺南の廉能の吏はこの知縣の右に出ずる者なし。而して知縣の目中、また可とする者少し。ただ余と相得て甚だ歡ぶ。これより先立つこと五日、前廣東巡撫楊文乾が驕從を率えて海豐縣を過ぐるあり。知縣はただ一館を掃除して待ちしのみにて他に供えし所なし。楊公曰く、吾が効せんと欲する者三あり、一に曰く貪、二に曰く庸（無能）、三に曰く怪。知縣平然として長揖して曰く、貪と庸とは該當せず。怪は確かに身に覚えあり。請うらくは効を受けんと。楊公悦ばず。詰るに地方の事を以てするに、條ごとに對えて了了たり。縣内を巡ること三日、數々田間の民に問うに、乃ち知る、知縣は政をなすこと明決、獄を折^{きた}むること神の如く、惡を嫉むこと嚴にして民を待つに寛なり。俸祿の外は一錢も指を染めず。地方大小の事務、辨ぜざるはなし。楊公喟然として大息して曰く、吾幾んど子を失せんとせり。知府は連りに六通の書を寄せて子の怪誕貪墨なるを言い、彈章を出して子を効せんことを請えり。思わざりき、子の賢の斯の如くならんとは。吾今にして子を知る。子それ勉めよ、と。これよりして始めて知縣は怪に非ずと謂う者あり。

本文は更に長く續くが、これによると王知縣は直屬上司の知府と正面衝突し、知府が知縣を彈劾すれば、知縣も知府の受賄を攻撃し、喧嘩兩成敗で何れも解任された。楊巡撫はもちろん知縣に加勢して推薦の勞を惜しまなかつたが、不幸にも楊巡撫は間もなく急逝した。知府の方は受賄が動かさぬ事實と認められ、その上に知縣から面のあたり侮辱されたので痛恨してやがて病卒した。相手が亡くなつた爲に知縣の倉庫の銀が虧欠していた理由も證明できなくなり、知縣は贓九百兩の罪に問われたが、按察使の樓儼はここでも知縣の罪を重くして、銀千三百兩の使いこみと定めた。幸いに同僚や縣民が義捐金を集めてこの金額を辨償した。藍鼎元はこの怪知縣が上司と衝突しても正論を通そうとした勇氣を賞讃して、自分の態度は中途半端で遙かに及ばなかつたと後悔している。併し官途から遠去かつた爲に、お互いに讀書の時間を得たのは思いがけぬ儲けもので、これは仇人の賜として有難く拜領すべきではないか、と結んでいる。これで見ると、當時藍鼎元のような人物は必ずしも唯一人だけしかない特殊の例ではなかつたことが分る。

何時の世の中にも善意の人はいるものだ。それらの人が本當に社會を支えている。特に中國のような長い傳統をもち、自己の文化に自信をもつた國では、時々の大勢に順應し、バスに乗りおくれまいとあせる人ばかりではない。自己の信ずる所に従つて忠實に自己のペースを守つて歩んでいる人がいつもある。ただ世の中の變遷に従つてこれら善良な人が浮び上る時と、惡貨が世にはびこる時とがある。世の浮沈に従つて、これらの人はたとえ野にあつても、野にあり乍らそれ相應の仕事をした人である。雍正という時代は、一寸見た目では怪と稱せられるような人物がある程度まで價值を見出された時代である。そして天子個人の意向が、意外に早く地方末端の縣政にまで浸透した事實を我々は知り得るのである。

藍鼎元は先に引いた雍正八年作の潮州風俗考の後半において、清朝の政治が漸く地方に浸透して風俗の一變したことを述べ、

聖諭廣訓を奉じてより以來、海嶺山陬、共に蕩平正直の王路を仰ぎ、毎に城鄉市鎮にて朔望に宣講するに當り、父老は杖に扶つて觀、童兒は翹首して聽く（中略）。邇者命案已に少きこと十の六七なり。讎忿を解き、身命を重んずる者これあり（中略）。土子は奔競を羞じ名節を勵み、公に非ざれば長吏の庭に至らず。たとい一二の儉習未だ除かず訟を好み蠶に結ぶものもあるも、皆鄉曲の容れざる所となり。他州に避匿して故土に還るを赧とせり（中略）。先には健訟習いを成せしも、今は已にその十の八を減じ、訟師は頭をかくし耳をたれ、散じて四方に行く者あり（中略）。先には逋賦風を成せしも、今は紳士みな踴躍して輸將し、公に急にして以て民望となる。本年の糧米は普・澄・惠・埔・平・鎮の諸縣の如き、或いは入秋已に通完し、或いは冬臘にみな廓清すべし。海・揭・程・饒の諸縣も凡て九割以上にあり。潮陽のみは積逋ありて追及し難きも、亦十月内に清して八割以上に至れり。奏銷に及ぶころおい、最優を得んこと綽々として餘りあらん。これ從來未だ曾てあらざりし事なり。

とあり、これでは少し話が旨すぎるような感じもするが、翻つて思うに、平均して民智の進んだ社會においては腐敗も深刻であるが、適當な指導者を得れば改善も亦早いのである。雍正帝の努力は決して空轉したのではなく、確かに手應えが

あつたのである。もちろん雍正帝の意向と言つてもそれは彼個人だけのものではなく、背後に社會全體の要求を控えての上であつたことは言うまでもない。これらの事は近世の中國史を理解する上に大切なことと思う。だから若しも清朝末期の混乱した社會を、中國數千年の歴史が最終に到着した最高の段階と考え、そこから前代に溯つて少し宛劣つた社會狀態の存在を想像するなら、それは單に過去の影像を歪めて見るのみならず、民國以後の飛躍的な進歩を理解することができないであらう。我々の雍正時代史研究は局外者が考えてくれる程の閑事業ではないのである。

四　　む　　す　　び

中國歴代の正史には史記を始め、循吏傳と酷吏傳を設けるを常とする。尤も酷吏傳は唐あたりで消滅し、宋史以後はただ循吏傳の方だけが残つてゐる。實際に宋以後、君主獨裁權が成立すると、地方官にはそれ程強大な權限が與えられぬので、昔のように人民を撫で斬りにすることは出来なくなる。漢書や唐書に載せられた酷吏に匹敵するような大物は實際に居なかつたのが事實であらう。但し、それと同時に德を以て一郡を化するような循吏も亦出にくくなつた。藍鼎元は清史稿卷四八三、循吏傳二の中に傳を載せられるが、循吏と言うよりは寧ろ能吏と言うべきであらう。

藍鼎元を能吏という理由は、近世の官僚が凡てそうであるように一面に循吏であると共に、一面には酷吏的な性質をも具えているからである。胥吏のストライキに對する彈壓や、租稅滯納の土豪に對する制御には、お上の委託という錦旗をかざして大上段の構えを見せる。これが酷吏と共通する點である。但し近世の能吏は決して無暗に傳家の寶刀をひきぬかない。どこまでも理攻めである。彼等は碁や將棋の名人のように深く手を讀む。相手もさる者で幾段構えの妙手を用意しているが、此方は更に多くの手數をもつてゐる。段々手を出して、最後に出す手のなくなつた相手が敗けてしまふ。相手を敗かして、此方の要求を通せば、それ以上に深く追究する必要はない。だから近世の能吏は決して無駄な血を流さない。

清史稿藍鼎元傳には

尤も善く盜及び訟師を治め、多く耳目を置き、効捕して稍しも貸さず。而して斷獄に平反する所多し。論者思えらく、殿にして殘ならず。

とあるのが肯綮に當つてゐる。これらの點から言つても中國の政治は秦漢以後二千年ほどの間に見違えるほどに成長し進歩してきたと言つてもよい。

近世の能吏は古代の循吏の後身であるが、兩者の相違は人民に對する感化力の懸絶する相違にあるであらう。古代地方民度の低かつた時には、中央から派遣された文化人長官の感化は絶對的な効果を發揮したこともあつたであらうが、後世は文化の普及と共に批判力も高まり、地方長官は減多に名聲を恣まにすることが出来なくなつたのは當然である。また中央の地方に對する經濟的な要求が増大するにつれ、中央に忠實な長官は反つて地方で厄介視される傾向すらある。地方人民が長官に望む所は、中央の權力を善用して、土着の棍徒の害を除いて貰うことがせいぜいである。その期待の少い所が同時に、いわゆる善政の限界でもあるのである。藍鼎元の功績も結局はそういう所に落つくであらう。

雍正硃批諭旨の内容は甚だ詳細である。併し鹿洲公案の記述は更に具體的である。それは地方民政に携つた者が直接に殘した史料である。事實は小説よりも奇なり、という古い言葉があるが、我々は鹿洲公案を読むとき、いわば捕物帳的な興味を覚える。本論稿の讀者は、或いは學術論文にあるまじき興味本位の記述だと顰蹙される向があるかも知れぬが、それは資料とした鹿洲公案そのものが面白すぎた爲である。もしも讀者が直接に鹿洲公案を読まれたならば、或いは反つて、著者の筆力の尙足らないことを攻めるように轉向されぬとも限らぬ。既にこのような好資料があるとき、何もわざわざ生きたものを殺し、こまざりにして干物にし、味もビタミンも抜いた上で食膳に供しなればならぬ規則はない。私はなるべく生のままでこの資料を紹介する義務を感じ、それに似合うような新しい額縁を造つてみようとしたのである。

註

(1) 雍正硃批諭旨に含まれた下級地方官の奏摺の例。第十一函六十八冊の孫國璽は雍正六年二月杭州府知府として、第十五函九十二冊の吳開杰は雍正二年八月兗州府知府として奏摺を上つてゐる。

(2) 藍鼎元の初任官。藍鼎元の鹿洲奏疏、履歷條奏第一に、漳州府漳浦縣人。年四十八歲。雍正元年拔貢。充內閣一統志館纂輯効力。雍正五年三月初四日。吏部欽奉特旨帶領引見。奉旨著記名遇有要緊知縣缺出奏聞。とあり、彼の長子雲錦の藍鼎元行述によれば六年冬普寧知縣に任ぜられたとあるが、六年は五年の誤りであろう。鹿洲公案卷上、五營兵食の條によれば彼は雍正五年丁未十月十八日抵任、踰月にして潮陽に署せられたとある。

(3) 藍鼎元の署番揭縣。雍正硃批諭旨。署理廣東布政使王士俊の雍正六年十二月初十日付奏摺に、普寧縣知縣藍鼎元。擬調番揭縣。已節次詳明督撫。聽候題補。とあり、別に鹿洲公案卷下、林軍師の條によれば、余適因公奉檄赴省。院司列憲。並擬薦調番揭。以首邑事繁。廢弛已久。留我即日在番視事。余固辭不可。至于臘月乃歸(中略)。奉參去位。とある。

(4) 藍鼎元の被劾。藍鼎元行述に、觀察(道台樓儼)銜之。屬藩臬(布政使王士俊・按察使尹繼善?)誣揭六畝。裁賊千餘。所革漁船例金其首也。漁人膏石刻鳴冤。弗省。奏上。奉旨革職。而觀察旋陞臬司。周納成獄。とあり、漁船例金云云はこの前文に、呂故有漁船四百。每船例四金。新令至。必輸金以易新照。府君峻却之。鑄石於泊舟之步。とあるに當る。王士俊がこの參劾に加わつたことは、彼の雍正七年七月二十四日付奏摺に、於署理布政使時。將署潮陽令藍鼎元。列款揭參。とある。更に革職後の罪狀調査に關

しては、硃批諭旨、鄂彌達雍正十年九月初三日奏摺に、緣雍正六年署潮陽事任內。有原任惠潮道樓儼。運貯潮陽西穀。被押運巡檢范仕化等。勾同船戶。沿途盜賣并買批殺擾和。共缺少穀三千二百石。樓儼令鼎元代賠。鼎元無力賠補。致被樓儼揭參革職。とあるが革職の時期は行述の方が正しいのであろう。

(5) 樓儼の按察使着任。硃批諭旨、傳奏雍正七年二月二十四日署理廣東巡撫としての奏摺に、樓儼於二月初九日。已到按察使任。とあり、藍鼎元の革職はこの直前のことであらう。

(6) 廣東における黨爭。硃批諭旨、王士俊雍正六年十一月十五日署理廣東布政使としての奏摺に、奉上諭。原任廣東巡撫楊文乾。係宣力封疆之大臣。朕聞其病故。心甚憫惻。聞(署總督)阿克敦。自廣西回至廣東。與(布政使)官達(按察使)方顯瑛等。懷挾私怨。以楊文乾病故爲快。演戲開筵。置酒稱慶。とあり、但し官達・方顯瑛が俱に解任されたのは早く五年九月のことであつた。

(7) 潮州府知府胡恂。行述に、郡守胡公延修府志。出府君於獄。諸款賴士民控區。上官同寅。傾囊囊腋。依限結案。例得回籍。とあり、胡恂は硃批諭旨書中にもところどころ名が見えている。

(8) 樓儼の人物。硃批諭旨、署理廣東布政使王士俊、雍正七年六月十一日付奏摺に、原任惠潮道樓儼。奉特旨署理臬司印務。到任四月以來。該員感激天恩。力圖報効。盡心辦事。不敢儉安。但自上年大病之後。未免精力少衰。(硃批。此人果肯竭力奉公。何事不克辦集耶。古人云。爲善日強。既能盡心辦事。朕可保其精神。行當倍增也。)とありこの時はまだ雍正帝は樓儼を信用していたらしい。然るに同年閏七月十二日、署理廣東巡撫傅泰が樓儼を召還されんことを請うの奏摺あり、雍正八年三月十一日、廣東總督郝玉麟の

奏摺には、尙廣東按察使樓儼。信用革役蕭鳴一案。經臣奏明。奉旨樓儼必有失於覺察之處。著解任來京（中略）。蓋役蕭鳴強橫肆行目無法紀。甚屬可惡。著該撫嚴密。定擬具奏。該部知道欽此。とあり、この後雍正帝の樓儼に對する評價は十分に變つてきた。雍正九年九月初四日付江西巡撫謝旻の奏疏に、查按察使樓儼。於上年十一月到任。臣見其履歷。開寫年六十三歲。恐其年力就衰。精明不足（中略）。知樓儼居心誠實行事謹慎。（硃批。言樓儼誠實。汝誤矣。）樓儼爲人忠厚。遇事過寬。（硃批。若言忠厚。更誤矣。留心試看。汝自知之。其遇事用寬。不過假仁慈。以沽名譽耳。非出自本心也。）と隨分手酷い批評を加えているが、そんな者を何故に江西按察使に再起させたか分らない。

(9) 鄂彌達の藍鼎元薦擧。硃批諭旨、雍正十年九月初三日署理廣東總督鄂彌達の奏摺に於て藍鼎元を薦擧した末尾に、硃批。藍鼎元應賠之項。如果全完。案件既經清楚。給咨令其赴部引見可也。とあり、次で同年十二月初一日の奏摺で追賠各項が清楚であつたことを述べ、業經前督臣郝玉麟題明。准部議覆。奉旨免罪。此外竝無不清之案。と證明せるに對し、硃批。俟引見後。有旨諭部。とある。その後のことは行述に、奉特旨赴京。十一年三月引見。奏對良久。命署廣州知府。賜御書諭訓詩文及貂皮紫金錠香珠等物。溫綸獎勵。蓋異數也。と見えている。總體的に見て僅か知縣級の人物が、その行述や墓誌銘によつてでなく、硃批諭旨のような救撰書でその履歷が細かく分るということは、これ亦雍正時代でなければ見られない特殊な現象である。

〔餘白錄〕 王建の詩再論

前號に私は、加藤繁博士「唐宋時代に於ける金銀の研究」に引用された唐の王建の送鄭權尚書之南海詩の中の

市喧盜賊破 金賤海舶來

の解釋について、初句の末三字を「盜賊が散走した」の意にとるべきを論じたが、更に讀み返して見るほどに、どうも落付きが足りない。そしてこの不安定感はどうも原文自體の缺陷から來ているらしい。何となればこの兩句は大體において對をなし、盜賊は海舶に對しているが、兩語はその構成を異にしている。即ち盜賊は（名詞||名詞）という連文であるが、海舶は（形容詞↓名詞）という構造である。これでは生半可な對であり、これを十分な對にするためには、海舶の方には手を加える餘地がないから、問題となるのは盜賊の二字である。これから先は第六感の世界であるが、私は盜賊の賊の字は、膽の字の誤りではないかと思う。いま佩文韻府を検するに「膽破」は屢々熟語として用いられ、その用例として南史王融傳、陳琳爲袁紹與公孫瓚書、任華寄杜甫詩などが引かれてゐる。更に「賊膽破」と續く例もあり、唐の陸龜蒙の南征詩に、「邊知賊膽從橫破」の句があり、唐書盧杞傳に、「懷光勲在宗社。賊憚之破膽」の語などがある。「賊膽破」が既に尋常の表現であれば、「盜膽破」も亦極めて自然の發想であり、王建の詩の一部として「盜賊破」に代る最も適當な言葉であると思う。

〔宮崎〕

The Real State of the Local Administration in the Yung-chêng 雍正 Period

Ichisada Miyazaki

It has been known that the Yung-chêng emperor paid special attention to the local administration and adopted some new policies for it. Here the author asks what degree the emperor's intentions were realized. He tries to offer an answer through analysing Lan Ting-yüan 藍鼎元's Lu-chou-kung-an 鹿州公案, i.e. the original records of the struggle against the interrupters of his administration when he was Chih-hsien 知縣 at P'u-ning and Chao-yang prefecture, Chao-chou-fu 潮州府, Kuang-tung 廣東 province. Most disturbances were arose from the activities of Shu-li 胥吏, Tu-hao 土豪, Wo-tao 窩盜 and Sung-shih 訟師. In spite of victory over them, he was removed from his post because of his chief's unreasonable hatred. However the emperor did not leave such a talented officer to suffer unjustly. Later he was restored his honor and promoted to Chih-fu 知府. The author concludes from the above story that the emperor's efforts for the local administration had actual results in practice.

Government School Inspectors 學臣 in the Yung-chêng Period

Toshikazu Araki

The most important duties of government school inspectors were to give some of the government examinations and to preside over all educational affairs in every province. Even the provincial governor could not interfere with their rights of examination and education, because they were dispatched by the emperor.

The Ch'ing-kuo-hsing-chêng-fa 清國行政法 vol. 3, (p. 491) explains that they were generally selected from among officials of the Han-lin Academy. But at the beginning of the Ch'ing dynasty [i.e. in the reigns of Shun-chih 順治 and K'ang-hsi 康熙], officials of the Han-lin Academy were seldom appointed to the post, and the local officials were often selected. In 1727, the Yung-chêng emperor decided to select them chiefly from among officials of the Han-lin Academy, in order to centralize provincial rights of education. In fact, the reign of the emperor was a transition from the political system of the Manchus to that of modern Chinese despotism.